

授業・ゼミ・実践共同体をつなぐ 「デザインされた越境学習」の可能性

大西 正泰

Connecting Classes, Seminars, and “Communities of practice” The Potential of “Designed Cross-Boundary Learning”

Masahiro OHNISHI

Abstract

Many students are less likely to cross borders into different communities. In order to overcome these issues, we practiced classes, seminars, and projects based on cross-boundary learning. The results show that cross-border travel is more advanced when teachers bridge the gap to communities of practice with a well-developed educational environment or encourage learning in culturally different places. In other words, it was found that it is more important for faculty members, who are knowledge brokers, to design bridges to the community of practice than for cross-boundary learning that is left to the independence of students.

Key words : Cross-boundary learning, Communities of practice, Seminars, knowledge brokers
キーワード : 越境学習, 実践共同体, 大学ゼミナール, ナレッジ・ブローカー

1. 研究の背景と目的

筆者が所属する吉備国際大学社会科学部経営社会学科は、学生のうち71.3% (2022.12.9現在) が留学生で、日本をはじめ、インドネシア・ベトナム・スリランカ・中国・韓国・カンボジアの7カ国で構成されている。2020年より筆者は所属しているが、COVID19の影響で、入学式や新入生歓迎式などの公式行事や大学祭などの主なイベントはオンラインもしくは中止になり、

交流機会が無い状態であった。こういった未曾有のパンデミックの影響で、サークル活動も下火になり、また上級生から下級生に引き継がれる学生文化の継承もどんどん薄れていき、同学年の水平方向コミュニケーションに加え、異学年との垂直コミュニケーションもどんどん減っていった経緯がある。

また、授業をしていく中で分かったのは、若者論で多く指摘されているコミュニケーションをコストで考える日本人学生が増えていることである。「さとり世

代)「マイルドヤンキー」などの言葉で若者論を表現している原田(2013)によれば、不景気しか知らない若者達は、ある行動を起こす際にどの程度リスクがあるのかという見込み損失で考えることを指摘している¹⁾。同じく「草食系」「おひとりさま消費」などの言葉を生んだ牛窪(2015)も、恋愛をコストパフォーマンスの悪い行為と考える若者像を指摘し、「デートって疲れる。やたらコスト(お金や時間)がかかる割に、トクがない」という声を紹介している²⁾。これらを言い換えると、日本人学生は現状持つコミュニケーション資産を前提に、最小コストの最適行動を考える行動原理になっているということである。その結果、コストのかからない、居心地の良い場所から越境しない学生像が見えてくる。

大学生のなまけ行動について臨床心理の立場から研究している住岡(2022)は、合理的かつ非積極的な若者の行動選択が、悩みの発生源となるようなものを消去してしまう点を「『悩まない』心理障害では葛藤が生じず実感が持てないため、不安や抑うつなどの苦痛に苦しむことがない」とし、「潜在的には卒業後就職をした後などに、不適応を起こす問題を抱えている可能性があるにも関わらず、問題性が表面化、意識化されない」点を指摘している³⁾。筆者自身、初年度から行なっている対話を取り入れた授業での声やアンケートを振り返ってみても、これらの指摘をとっても実感している。また、コミュニケーションを積極的に取らない日本人学生の特徴を留学生からもよく聞く。

筆者はまちづくりを専門としているが、近年のホットなキーワードは「つながり(社会関係資本)」「サードプレイス」につながるものが多く散見される⁴⁾。地域再生でいうところの関係人口は、都市と地方のつながりを指し示す言葉であるし、社会関係資本という側面で言えば、社会的な結びつきの減退が社会の幸福度を下げ、格差を生むなどの方向で論じられている。そういったつながりを復活させる場の起点として、家でも職場でもない第三の居心地の良い場所=サードプレ

イスが注目を浴びてきた。

逆に、こういった居心地の良さやつながりの必要性が主張されてきたのは、「分断」が世界中で見られるようになったからである。特に2016年のアメリカ大統領選以降、特に分断というキーワードが論じられるようになった。国際政治アナリストの渡瀬(2019)は、アメリカの政治で起きている「分断」を分析し、「民主主義社会におけるアイデンティティの分断は、選挙のマーケティング技術の発展によってもたらされている」とし、「本来は多様であるはずの人々のアイデンティティは画一的で単純なものに押し込められていく。」と指摘している⁵⁾。自分の意見が違い同士で繰り返し交流することで、より先鋭化した意見になりやすいエコーチェンバー現象や、また、Googleなどの検索エンジン、SNS、動画配信のYouTubeなど、利用者の検索および視聴履歴によって最適化されていくアルゴリズムによって、使えば使うほど、自分にカスタマイズされた世界しか見えなくなる仕掛け(フィルターバブル現象)がより深刻化させている⁶⁾。

こういった世界中での「分断」現象の中で、上述のような学生が増えていることは、自主的に選んだと思わされている情報で、つながった仲間と居心地の良い場所で話をしているうちに「分断」となっている可能性が高い。

こういった知らぬまに浸透していつている現象に抗うことはできないのだろうか。これが本稿での問題意識であり、この課題の改善を進めていくことが目的となる。

本稿では、「分断」をほぐしていく作用として「越境」に注目し、2020年から2022年にわたって筆者が行ってきた授業、ゼミナール、課外活動(各学生が自主的に行っているマイプロジェクトと、筆者が教育的意図を持って異なる地域や教育団体などで行ってもらった学習)の実践報告を行う。

この自分の居場所(Home)から出ていき、異なった場所(Away)へと越境して学ぶ行為は「越境学習」

と呼ばれ、経営学における組織論や、キャリア教育はじめ様々な学問分野の学習理論として取り上げられている⁷⁾。

筆者が行ってきた実践では、共通学習原理として「越境」を積極的に取り込み、授業・ゼミ・課外活動（越境学習）の往復運動による学びについて取り組んできた。

こういった越境学習において、越境元となるHomeやAwayが学びの共同体としての特徴については、実践共同体（communities of practice）⁸⁾として研究が各方面で進んでいる。本稿では、授業・ゼミ・実践共同体をつなぐことで、異なる実践共同体への行き来や、越境の橋渡しを行う人材「ナレッジ・ブローカー」⁹⁾の可能性も含めて、実践報告を行う。

2. 先行研究からみた越境学習と実践共同体について

本稿のキーワードとなっている越境学習から見てみる。越境学習や実践共同体は、「発達の最近接領域」を唱えたヴィゴツキー、「拡張的学習」のエンゲストローム、「正当的周辺参加学習」のレイブとウェンガーなどを軸に発展してきた。

これらの議論を踏まえて石山・伊達（2022）は、「越境」とは「個人にとってのホームとアウェイの間にある境界を越えること」とし、「ホームとアウェイを往還する（行き来する）ことによる学び」を越境学習と呼んでいる¹⁰⁾。ここでいうホームとは主として所属している共同体や場所のことを指し、アウェイはそれ以外の共同体かつ場所をさし示す。実践共同体の特徴について、ウェンガー（2002）の「あるテーマにかんする関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、持続的な相互交流を通じて深めていく人々の集団」が定着している¹¹⁾。

松本（2019）は、ウェンガー以降の実践共同体の研究をまとめて、実践共同体の特徴を①境界横断性、

②非公式性、③自発性・自律性、④相互作用性の4つに分類している¹²⁾。境界横断性とは、「組織の縦と横の境界を横断してコミュニケーションや相互作用を起こしやすくする特性」である。松本（2019）は越境横断性を促進する特徴として、さらに二重編み組織・多重成員性・越境物象・ブローカリングの4つを指摘する。ウェンガー（2002）は、ホームとアウェイを行き交うこと（往還）で二つの関係性が織りこまれた関係＝二重編み組織になることが越境の誘因性を担保する特性とした。また、この二重編み組織は、共同体のメンバー自身が常に複数のホームとアウェイの重なり合うメンバーになっていること＝多重成員性をもった越境者たちであることも同様に指摘している。それゆえに、越境横断性が高まり、メンバーによる往還運動が必然的に起こるようになる。加えて、こういった越境を引き起こすのはモノ・コトでも可能であり、そのことを越境物象という。例えば、異なる所属の人々が共同で制作物を作るなど、異なる越境への橋渡しになるものが全て越境物象になる。こういったホームとアウェイの垣根を越える仲介（ブローカリング。仲介人はナレッジ・ブローカーと呼ぶ）があることで、越境はスムーズにいくことが知られている¹³⁾。

次に②非公式性である。これは、主に自発的な学びの共同体として実践共同体は作られることが多いので、会社や公的組織で設置されたものでは必ずしもなく、集合離散が自由な非公式な性質を帯びている。それゆえに、③自発性・自律性がその特徴になる¹⁴⁾。最後にこれらの特性は、越境学習者同士による自発的で、繰り返しホームとアウェイを往還する④相互作用性があることは言うまでもない¹⁵⁾。

この相互作用について、石山・伊達（2022）は、香川（2008）の整理を踏まえて、状況間移動・多重混成の2つにまとめ直している¹⁶⁾。状況間移動とは、ホームとアウェイの往還運動である越境学習を指し、多重混成は、例えば、まちづくりの会議で異なる複数のコミュニティから集まりあった時にできたような異集団

混成での越境学習のことを指す¹⁷⁾。本稿では便宜上、前者を「越境学習Ⅰ」、後者の多重混成による学びを「越境学習Ⅱ」と表記する¹⁸⁾。

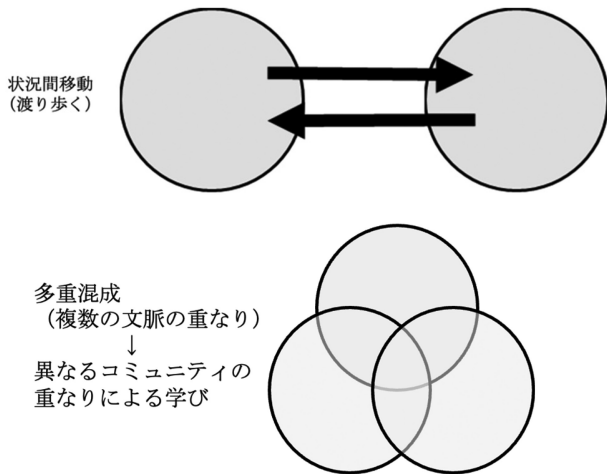


図1 2種類の文脈横断（状況間移動と多重混成）

越境学習Ⅰの越境学習プロセスについて、石山・伊達（2022）たちは次の表1のようにまとめている¹⁹⁾。

表1を説明すると、越境学習には越境前・越境中・越境後3つのフェーズがあり、その下位カテゴリーには、越境前のマインドセット段階をはじめとする6つのフェーズが設定されている。

表1 越境学習プロセス

越境前	越境中	越境後
<p>越境前にマインドセットを整える段階</p> <p>越境先への適応に向けた準備を進めつつ、越境者が個人として何をやりたいのかを見つめ直す</p>	<p>越境先に衝撃を受けつつもあがく段階</p> <p>所属組織と越境先のやり方の違いに苦しみ、それでも何とかしようとして、もがいていく</p>	<p>越境先に慣れて戦力になる段階</p> <p>越境先でも上手く振る舞えるようになり、越境先に対して自分なりの貢献を果たす</p>
	<p>越境先を理解して視座を高める段階</p> <p>越境先の状況や業務に関する理解を深め、所属組織と越境先の両者を俯瞰する視座を得る</p>	<p>自社に衝撃を受けつつも、学びを保持して再適応する段階</p> <p>所属組織の制度やメンバーに違和感を覚えるが、自分を取り巻く状況を認識し、所属組織に再び適応する</p>
		<p>少しずつ行動を起こし、周囲を巻き込む段階</p> <p>自分の考えを周囲に伝え、小さな行動を起こしながら、社内外の様々な人の協力を得られる状況を作り出す</p>

石山・伊達（2022）はこのプロセスでの特徴を2つあげている²⁰⁾。1つは「越境学習者は二度の葛藤を通して学ぶ」こと。越境学習者は、越境中と越境後の2回のフェーズでそれぞれ葛藤をすることがわかっており、特に越境後の葛藤の方が大きいとしている。1回めの葛藤については「越境先では、今までとやり方が違って戸惑い、コミュニケーションが取れなくなる（葛藤）→苦しむ中でもがき、試行錯誤する（行動）→自分の置かれた状況を客観視する（俯瞰）→越境先の組織と所属組織それぞれの強み・弱みを把握し、周りを巻き込み挑戦する（動員）」といったプロセスの中で起きる。越境後でも、元の組織と越境先との違いの葛藤が起き、葛藤→行動→俯瞰→動員の4つのプロセスを辿ることになる²¹⁾。

2つめに、越境学習プロセスも先ほど述べた葛藤の4プロセスについても左から右に直進的かつ段階的に積算されるものではなく、学習環境と個人との関係性で、随時ランダムにフェーズが生起し、往還して積算されていくものだと考えられている。

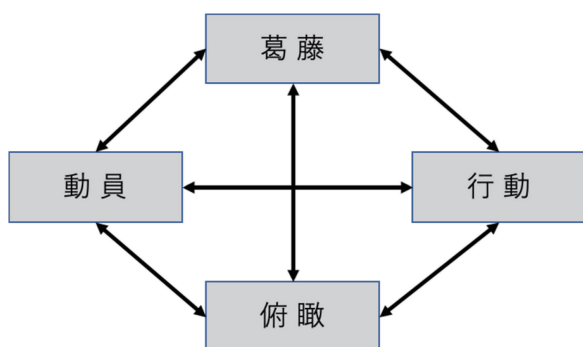


図2 越境学習者のアイデンティティ変容の相互作用プロセス 出所 前掲書7) p169

3. 実践報告2020～2022までの授業・ゼミでの越境学習設計

(1) 授業・ゼミ・実践共同体をつなげる目的

吉備国際大学のある高梁市は、人口28万人の過疎化の進む地方都市でありながら、備中松山城をもつ城下町という文化背景もあり、私立大学1校、高校が5校（県立2校、市立2校、私立1校）も集積している学園都市である²²⁾。この教育集積地を活用し、吉備国際大学を核とした社会関係資本を作ることで、経済のみならず様々なイノベーションが起こる土壤が生まれると考えた。この背景には、筆者のまちづくり実践での体験がある。筆者は2011年から現在まで、日本料理の妻もの栽培や45分別のリサイクルを行なうSDGs未来都市にも選定されている徳島県上勝町や、地域みらい留学（過疎によって募集定員を下回った地方高校が、地域と連動した魅力ある実践を行うことによって、生徒募集を全国に広げている）²³⁾ 支援などの取り組みを行なっている。例えば、地域みらい留学を実施している島根県津和野高校と島根県津和野町内外のメンバーで取り組んでいる国際カンファレンス「津和野会議」（2019年から毎年開催）では、高校での探究学習（T-PLAN）、課外部活動「グローバルラボ」の地域実践を通じて、社会関係資本が豊かに生まれていることが見てきた²⁴⁾。

こういった実践の蓄積の中で、教育を起点にした地

域活性の機運がまちづくりのイノベーションを起こす契機になることを実感してきた。

しかし、筆者が大学に赴任した2020年当時の高梁市では、吉備国際大をはじめ、各高校もそれぞれが独自に行い、連携がほとんどなかった。また、高梁市には大学連携室が設置されているものの、そういった連携を主とする部署と地域活性化を行う市内の各団体との連携も少なく、社会関係資本すなわちつながりが貧弱なことが高梁市の課題であることが見てきた。

このような背景を踏まえ、吉備国際大学を核とした、特に筆者のゼミをハブにして社会関係資本のつながりを作れば、地域活性の土壤につながるのではないかと考えるようになった。

(2) 授業・ゼミをつなげた実践

まずは所属する吉備国際大学経営社会学科を紹介する。

表2 吉備国際大社会科学部経営社会学科学生数

全体	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生以上	総数
日本人	18人	14人	30人	17人	1人	80人
留学生	41人	57人	48人	50人	3人	199人
総数	59人	71人	78人	67人	4人	279人
留学生割合	69%	80%	62%	75%	75%	71%

出所 吉備国際大学社会科学部経営社会学科学生名簿より筆者作成（2022年12月31日現在）

表2の在籍人数を見てみると、本学科の最大の特徴は学生の7割が留学生だという点である。学生の国籍は7カ国から構成され、留学生の多くが社会人経験を持つことから、年齢も20代から30代まで多様である。そういった点も含め、異なる文化背景を持つ学生たちが、授業中に対話やグループ活動を繰り返し行うことで、越境の面白さを体感すれば、自ずと越境していくのではないかと考えた。

筆者が担当している主な授業は以下の通りである。

*キャリア教育などの担当科目は省略。

表3 筆者が担当する主な授業と受講人数

	授業名	2020年			2021年			2022年		
		受講者数	留学生数	留学生割合	受講者数	留学生数	留学生割合	受講者数	留学生数	留学生割合
1年生以上	ソーシャルデザイン論	なし*	なし*	なし*	52	38	73%	50	34	68%
2年生以上	地域づくり論	64	41	64%	85	42	49%	42	30	71%
3年生以上	地域マネジメント	28	21	75%	42	36	86%	72	45	63%
3年生以上	地域課題解決法	39	34	87%	39	34	87%	68	41	60%

出所 吉備国際大学社会科学部経営社会学科成績記録などより筆者作成（2022年12月31日現在）

*ソーシャルデザイン論は、2020年は新カリキュラムのため不開講。

表3の各授業を要約して紹介すると、まちづくりの入門編に該当するのが「ソーシャルデザイン論」「地域づくり論」になる。「ソーシャルデザイン論」のフォーマットでは、a) 社会課題を変えた事例、b) 事例の感想と事例を使ったアイデア創造を主としている。「地域づくり論」では、c) まちづくりの源流を巢作り求め、歴史的にどのような変遷が起きてきたのかをもとに、d) それぞれの感想を述べあうをフォーマットにしている。3年生以上になると専門領域に入り、「地域マネジメント」では、e) 全国のまちづくり先進地域のテーマ別事例研究と、f) テーマに対する対話ワークショップやレポートになる。「地域課題解決法」では、g) 実際のケースに取り組む。ちなみに、先立って説明すれば、2020年岡山県西粟倉村、2021年高梁市吹屋地区、2022年高梁市本町地区の地元企業（ひな人形生産日本1の事業課題）の企画の立案・プレゼン、良いプランについては企業と一緒に実現化することになっている（小さな実践共同体からイノベーションが起きる学習体験）。

2020年はCOVID19の影響を受けたことにより、大学での授業はオンライン、積極的な地域への働きかけはできなかった。そういった中で、大学での授業の中で越境を繰り返し、実践共同体を体感する場面を多く作る。そして、次に、学生の中から誕生した越境学習者が越境できる実践共同体づくりを行うことが必

要だと考えた。まずは、授業の中での実践仮説を以下のように考えてみた。

実践仮説1-1 授業でグループ学習（小さな実践共同体）を作り、その中での越境を繰り返せば、「小さな越境学習者」が生まれる。

実践共同体とは「あるテーマにかんする関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、持続的な相互交流を通じて深めていく人々の集団」であり、ここでいう「小さな実践共同体」とは、短期的に作られた、授業の中での少人数グループを指す。また、この人工的な機会によって作られた「小さな実践共同体」を行き来できるようになる学習者のことを「小さな越境学習者」と呼ぶことにする。これの創発を繰り返すことができる、自発性に基ついた境界横断性や相互作用を生む対話型ワークショップを各授業のベースに置いた。

今回の実践では、次の対話ルールによるフォーマットに基づいて構成してきた。

表4 小さな越境学習のための対話ルール

	内容
対話ルール①	まずは1人で考える。（越境前のマインドセット）
対話ルール②	次に2人→3人→4人と人数を増やして一緒に考える。（越境での往還を繰り返す）
対話ルール③	チームの編成ルールは、人数を増やすごとに変える。（越境ルールを変える） 2人（隣席）、3人以降は（例；異なる国の人と組む）編成ルールを毎回変えることで、偶然の出会いによる結びつきを楽しむ。
対話ルール④	元の席に戻って、隣席の人達と話し合う。（越境前の場所に戻る）
対話ルール⑤	毎回の授業で感想・レポートにまとめる。（越境後に1人でまとめ直す）

出所 筆者作成

この「小さな越境学習のための対話ルール」は、エリオット・アロンソンが提唱した「ジグソー学習」やワールドカフェなどのワークショップ技法をもとに越境学習用に作り直したものである²⁵⁾。「ジグソー学習」もワールドカフェも基本フォーマットは、「テーマ設定→母集団（Home）で対話→越境して他の集団に入って対話（Away）→またの母集団に戻って、学びのシェアをする→これを繰り返す」である。筆者が考えた対

話ルールでは、越境回数を増やす・越境ルールになれる・越境メリットの享受（越境を繰り返すことで多様な見方を手に入れることができる）の3つを念頭に置いて作成した。

また、①～③の越境を繰り返すことを重視し、その際の気づきについては、必ずオンライン（大学のあらゆる情報を伝えるユニバーサルパスポートを利用）で書きとめるようにした。情報をオープンにし、互いの意見の組み合わせが成長の助け合いになるように配慮している。

実際の授業での様子が次の写真1と2である。



写真1 (左)「2020年地域づくり論」(2人で対話)

写真2 (右)「2022年地域づくり論」(4人で対話)

写真は、対話型ワークショップを行なっている時の様子である。1人で考えた後に、2人で対話し（写真1）、次に3人以上のチームを作って対話する（写真2）。

この往還運動によって、越境の壁を感じることなく、スムーズな越境がいずれできるようになると推測した。

この授業における課題は、2つある。1つは授業の間で生起を繰り返される短期的な実践共同体であること。2つめに、この学習によって、他の実践共同体へと越境するとは限らないことである。例えばクリス・アーンスト、ドナ・クロボット＝メイソン（2018）は、集団で越境する場合、「グレート・ディバイド」（集団間がぶつかりあう）が起こることについて言及している²⁶⁾。また松尾（2021）は、個人の視点から、過去の成功体験に縛られて、新しいノウハウを獲得できなくなるコンピテンシー・トラップ（有能さの罠）といった成功による学びの固定化・固着化を指摘してい

る²⁷⁾。言い換えれば、固定化された学びを捨て（松尾は「アンラーニング」と呼ぶ）、新しい学びを得るためのコスト（つまり越境コスト）を払うのは難しいということである。このことは、単純に越境学習を繰り返して成功体験を持ったとしても、大学の中での越境学習で満足してしまう可能性があるということである。

そこで、筆者のゼミでは、授業ではできていなかった自発・自律的に実践共同体を作ってみて、ゼミ生が越境学習者のモデルになることを目指した。

実践仮説1-2 ゼミを実践共同体（ホーム）にし、繰り返し越境を行えば、ゼミ生は「小さな越境学習者」になる。

本稿では、2年生からゼミを始め、2年間越境学習を受けてきた2020年度入学生のゼミカリキュラムを紹介する。（2021年度入学生からは新カリキュラム変更に伴い、3年生よりゼミ参加になる）

2020年度入学ゼミ生は、2021年度2年生時には11名、2022年度3年生時には転科学生などの受け入れに伴い合計17名となった。（2年間越境学習に取り組んできた11名と、1年間越境学習に取り組んできた6名の違いが生まれた。）ゼミ生の国籍別内訳を表5にまとめた。留学生の多くは社会人経験があり、年齢幅も20代から30代前半まで、キャリア豊かなメンバー構成である。

表5 ゼミ生の国籍内訳（合計17名）

2021年度ゼミ（11名）		2022年度新規加入（6名）		合計
日本	4名	日本	2名	6名
インドネシア	6名	インドネシア	1名	7名
韓国	1名	韓国	1名	2名
		スリランカ	1名	1名
		ベトナム	1名	1名
		総数		17名

出所 筆者作成

筆者のゼミプログラムは、大別して、プロジェクト学習と、自分の興味関心に基づいて必要な本を読み、卒業論文につなげていく輪読学習から成り立っている。そして、これらのプログラムを個人・グループ（全体）で取り組むかで分類した4種類の学習プログラム（図3）の組み合わせで行なっている。

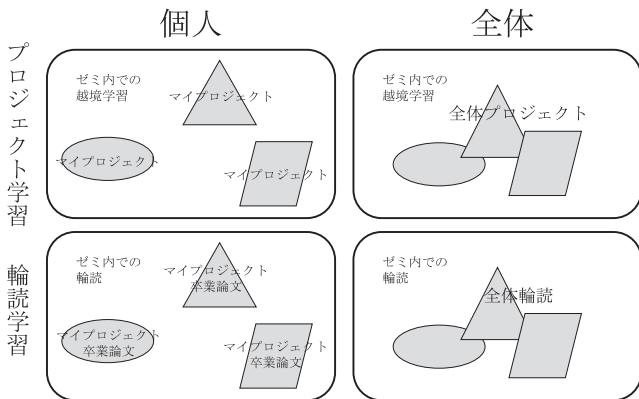


図3 ゼミでの越境学習プログラムの全体図

出所 筆者作成（各図形は異なる個人を表す）

図3の4象限で見ると、上部には、個人ごとに行うプロジェクト(マイプロジェクト)と全体プロジェクト。下部には、卒業論文に合わせた個人ごとの輪読、全体で検討し合う輪読となっている。

マイプロジェクトは、概ね3ヶ月を1クールにして、自分がやってみようと思うプロジェクトを考え実行するというものである。これまでに行われた実践では、古民家やアパートのDIY、ゼミTシャツの作成、スキー旅行の企画・運営・実施（大学内外で48名もの参加があった）などがあつた。



写真3 壁紙張り替え



写真4 ゼミTシャツ作成

全体プロジェクトでは、ゼミだけでなく、いろんな

学生たちにも参加を募り、インターンシップ参加や、地域や高梁市などが支援するBBQイベントに参加するなどを行なってきた。基本的には全情報をLineアプリでオープン化し、全員が同じ情報を共有できる。また、イベントやプロジェクトごとにオープンチャット機能を使ってルームを作り、写真や進捗情報を流しあっている。



写真5 イベントでの様子

また、2021年時点では全員に読書習慣がなかったの、各自が卒業論文を問わず、興味関心あるものを毎週少しずつ読み、口頭で感想を述べるところからスタートし、次に全体輪読を行った。全体輪読では、教師側で1冊の本を選ぶ。4人程度のグループに分かれ、1人が司会となり、グループで音読をする（留学生が多いため）。音読が終われば、司会を中心に難しい用語や難しい言い回しをリストアップし、それぞれ調べて、解釈を検討していく。その後、全体で解釈の分かれる用語や表現について、全体で議論をするというオーソドックスなものを行っている。



写真6 (左) ゼミでの発表の様子 (個人輪読)



写真7 (右) ゼミでの発表の様子 (全体輪読)

次に行ったのが、越境学習型の輪読(個人)である。各自が読んだ本について、本を選んだ理由・本の要約・感想及び疑問をパワーポイントにまとめる。そして毎週ゼミの時に発表。最初に基礎となる4人グループを

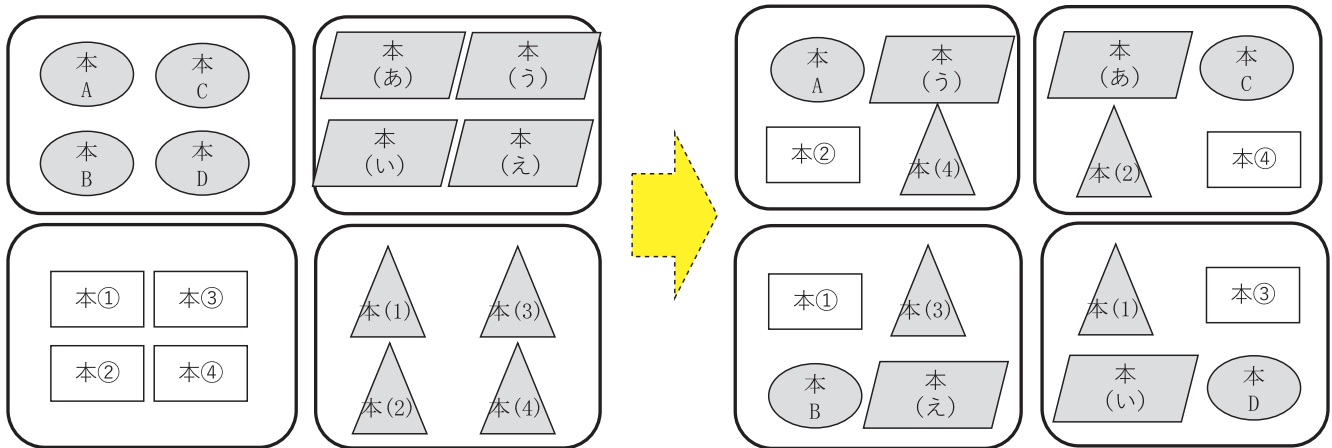


図4 ゼミにおける個人輪読による越境学習プログラム

出所 筆者作成

作り、最初の司会を決める。司会は、タイムマネジメントと質疑応答のファシリテーションである。発表者は持ち時間7分（各自5分発表2分質疑応答）で行う。発表が終わった順に司会を交代して全員が司会（ファシリテーション）と発表を行うようにする（1グループ1ターンで約30分程度）。司会が当たったファシリテーターは、主にお互いの本の選び方・まとめ方などの良さ、互いの改善ポイントの話しをする。

図4の左のグループから右のグループのようになるように、各チーム1名が残り（図4各グループの左上に位置する本A・①・あ・1）が該当、残りの3人が重なり合わないよう、異なるグループに移動し、再び同じルールで発表・質疑応答を繰り返す。これはワールドカフェから最後の振り返りをのぞいた簡略版になっている。

(3) 実践共同体へつなぐ越境ルートを作る

次の課題として、「小さな越境学習者」が実際に大学外へ越境していくには、実践共同体が必要になる。また、越境学習を越境たらしめるのは、繰り返し越境のたびに生じる葛藤と越境後の学びにあり、そういった特性から考えると、まずは学生が地理的にも往還運動がしやすい地域内実践共同体が必要になる。加えて、越境学習をより質の高いものにするためには、ホーム

とアウェイの往還運動を促すと同時に、「越境から越境へ」と次なる越境を生み出せるような実践共同体であることが望ましい。

この観点からみると、高梁市にはまちづくりに関わる中間支援組織も少なく、多重混成型の実践共同体がなかった。そこで、筆者の過去の実践で有効に機能した2つの成功事例をもとに、実践共同体を作ることにした。1つは、田舎暮らしに、社会性の高いプロジェクト（アドプトプログラム、アートインレジデンス）を入れて、町の中の寛容性を高め、田舎の環境+都会の仕事を組み合わせたサテライトオフィスで有名になった徳島県神山町の「みんなのごはん」実践。もう1つは、島根県津和野町で毎年開催されている国際カンファレンス「津和野会議」である。筆者自身が参加し、肌身を持って体感した2つの実践は多重混成型実践共同体の組み合わせとして最適であろうと判断した。

まずは「みんなのごはん」実践の概略を振り返る。東京から徳島県神山町に移住してきたオーナーたちが古民家を改装し、フレンチレストランとゲストハウスを運営していた「カフェ オニヴァ」を中核に、2014年前後に頻繁に開催されていたごはん会のことである。当時の神山町は、視察ラッシュで多くのかたが視察にきており、来客があるたびに地元の有志と一緒にご飯を食べるというものであった。個人宅で行われる

スタイルと、外食スタイルの2つが当時たくさん行われ、筆者も何度も寄らせていただいた。

この「みんなでごはん」という取り組みは、田舎ではなかなか出会えない知識層・経営者層の人々が多く来ており、まちづくりに関心の高い多重成員が構成し、かつ越境コストの低い多重混成型実践共同体になりうる。



写真8 (左)「みんなでごはん」(2014年筆者撮影)

写真9 (右)津和野高校ランウェイ(2022年筆者撮影)

2つめの津和野会議も、日本科学未来館もと副館長である中西忍氏や津和野藩家老19代目多湖家当主にあたる多胡真宏氏や津和野高校教育コーディネーター、大阪大学との共催で2019年にスタートしている。

この国際カンファレンスでは、全国的に有名なまちづくりの実践者やイギリスのトットネスはじめとする国際的に有名な実践者が行う会議で、そこに津和野高校生たちが参画し、さまざまなプロジェクトを繰り広げている(会場も藩校養老館を中心に、まちなかでいろいろ行われる)。例えば、2022年は武蔵野大学津村耕佑氏と半年かけたランウェイ(地元の素材や伝統を服装に反映)を仕掛けるなど、高校生のプロジェクトによって大人や地域が刺激を受けて動き出す仕組みができつつある(写真9)。

津和野会議は表6のように、日本やイギリスの成功事例の報告と、津和野で活躍するケース分析で「先進地域などの成功事例はどのようなプロセスでうまくいったのか」を明らかにすることであった。第2回以降では「まちづくりの担い手はどのように育っていくのか?」、第3回では「市民の気持ちに火をつける仕組み」が問われた回であった。こういった問いをベースに、1年の準備期間をかけて行われるのが津和野会

表6 2019年津和野会議スケジュール²⁸⁾

スケジュール: 9時 主催者挨拶・オリエンテーション
9時15分～10時30分 セッションA「地域と創造性」 モデレータ 松本文子(大阪大学特任助教) パネル 中村政人(アーティスト、東京芸術大学教授)、山本竜也(教育魅力化プロジェクトコーディネーター)
10時45分～12時 セッションB「地域のREconomy」 モデレータ 大西正泰(ソシオデザイン代表理事) パネル Brendan Barrett, Cihangir Istek(大阪大学CO*デザインセンター特任教授)、坂和貴之(Founding Baseマネージャー)、金子浩明(グロービス経営大学院教授)
12時～13時 昼食休憩
13時～15時 分科会 Team Tago: ファシリテーター 山崎吾郎(大阪大学准教授) Team Tsuwano: ファシリテーター 谷明洋(オンデザインパートナーズ) Team Akiya: ファシリテーター 牛木力(教育魅力化コーディネーター)
15時～16時 コーヒーブレイク
16時～17時 ケーススタディ・ディスカッション モデレータ Brendan Barrett(大阪大学CO*デザインセンター特任教授)、平野しのぶ(Fortress Investment) パネル Jay Tompt(Totnes REconomy Centre)
17時～18時 サマリーセッション
18時～19時 カクテル 藩校養老館美術会場 19時～21時 レセプション 津和野町コミュニティセンター集会所 以上

議の仕組みであった。

これらを踏まえて、まず津和野会議を雛形に新たに実践共同体「備中高梁会議」を構想した。備中高梁会議では、手間をできるだけかけず、気軽にできる仕組みに念頭をおいた。なぜなら、これまで多くのまちづくり実践では、同じメンバーが長くまちづくりを続けることによる疲弊、担い手自身がまちづくりの課題そのものを背負ってしまう「まちづくり疲れ」を起こしていることが多いからである。また、実践共同体として、「すごい人がすごい発表をする」という形でなく、普通の人も発表し、参加しやすいレベル感に設定することで、多重混成型の越境しやすい実践共同体ができると考えた。

このタイミングに合わせて、2020年に移住してきた元教育系ベンチャー企業役員で、高梁市教育コーディネーターをしている横山弘毅氏やまちづくり有志たちと共に2021年に「高梁100Challenge」を設立した²⁹⁾。この団体は、高梁市に100の挑戦プログラムを生み出していこうという目的で作られた。

この団体で、高梁市内のまちづくり活動や、教育に

携わっているメンバーの発表報告会を兼ねた「備中高梁会議」を2022年3月に立ち上げた。2022年12月までに3回実施した（場所 順正学園記念館）。

表7 備中高梁会議第一回プログラム³⁰⁾

時間	登壇者	所属	内容
10:00-10:15	横山弘毅	高梁100challenge代表	挨拶・100challenge活動報告
10:15-11:15	長江有祐	元ラグビー日本代表	スペシャルゲスト講演「プロ選手」兼「社団法人代表理事」長江有祐が語った夢「ラグビー界にSDGsを達成する場をつくりたい」
11:15-11:45	吉備国マイクラプロジェクト 戸田龍（松山コーヒープロジェクト） 高梁高校給食チーム（2名）	吉備国際大 松山高校 高梁高校	高梁市をマイクラで立体観光マップを作るプロジェクト 松山コーヒープロジェクト 高梁特産品で給食メニュー
★質疑応答&パネルトーク			
11:45-12:20	矢動丸花子 高梁高校空き家チーム2名 栄町商店街空き家活用チーム 2名	高梁市地域おこし協力隊 高梁高校 高梁城南高校	守内商店リノベーション等 市内の空き家活用、リノベ挑戦 栄町商店街空き家活用ふらっと
★質疑応答&パネルトーク			
12:20-13:10	昼休憩		
13:10-13:50	大西正泰	吉備国際大学	基調講演 徳島県上勝町での取り組みと高橋の可能性、ここからのまちづくりについて
豊田昌代 藤井大智	高梁出身、移住ドラフト等 高梁高校	移住ドラフトも地方でプロフェッショナル人材つなぐ ドラゴンで高梁PR動画撮影など	
13:50-14:40	ジョ・ヴァング 福原淳子校長	吉備国際大 高梁中学校	国際交流・多文化共生プロジェクト 高梁中学での地域連携学習の取り組み
★質疑応答&パネルトーク			
14:40-15:15	丸山幸子 赤迫靖浩（白石さん）	有漢さつまいも会議 赤迫農園ビオーネ・トマト農家	有漢から農業ブランド化 備中町から農業革命、高付加価値化に挑戦
★質疑応答&パネルトーク			
15:15-15:30	山本幸歩（赤迫さん）	カエリタイ（慶應SFC）	岡山出身の大学生の帰省支援&地域インターンサービス
15:30-15:40	途中休憩		
15:40-16:20	瀧渡校長/福地小・6年 片山智恵	福地小学校校長 高梁城南高校（卒予定）	福地PR大作戦 高校生カフェ・ジョナカフェの活動報告
★質疑応答&パネルトーク			
16:20-16:25	井上晋雄	高梁フィルムコミッション	ロケ地マップ&燃えよ剣上映会&映画ロケ案内
16:25-16:50	ワークショップ		
16:50-17:00	クロージング		

備中高梁会議の構成は、(1) 成功事例からの刺激、(2) 実践発表、(3) 交流（ワークショップ）で構成されている。成功事例からの刺激として、第1回会議には、ラグビーを軸としたまちづくりを行なっている元日本代表長江有祐氏。第3回は、コミュニティビジネスとして2017年度ウーマン・オブ・ザ・イヤーなどを受賞した制服リユースさくらや創業者馬場加奈子氏（高松から全国100店舗）にゲスト登壇してもらった。(2) 実践発表は、表7にあるように、地元の農家の皆さんの実践など報告がたくさん行われた。

高梁市内の小学校から大学までの取り組みも発表され、経営社会学科からは、本ゼミ生はじめ、ゼミ横断プロジェクトとして実施しているマイクラフト（ブロックで世界創造できるゲーム）によって、高梁市を再現し、オンライン上での観光施設を作り上げた「高梁市街地立体観光マッププロジェクト」などが発表された。



写真10（左）高梁会議での交流の様子（筆者撮影）
写真11（右）マイクラフトの発表（筆者撮影）

さらに、2022年6月から、毎月2回程度、換気の良い会場などで「みんなでごはん」実践を行なってきた。1～4年生までの学生や卒業生を含む社会人の31名の会員がいて、いろいろなつながりが生まれてきた。

表8 「高梁100Challenge」の企画イベント

年	内容	講演者
2021年		
7月20日	高梁ふるさと納税10倍プロジェクト	POMAL0株式会社澄川恭子
7月31日 8月1日	プロのクリエイターに学ぶ 動画づくり講座	クリエイター安里研太
8月4日	高校生SDGs起業家に学ぶ 「大人を巻き込み」プロジェクトを成功させる秘訣！	一般社団法人SustainableGame 代表理事 山口 由人（高2）
9月5日	「好きなことで生きていく ためには？」を考える	岡山理科大久永啓
10月3日	SUUMO編集長によるまち論 キャリア論	株式会社リクルート池本洋一
2022年		
3月5日	備中高梁会議2022春	多数
3月21日	高梁市のこれからのまちづくりシンポジウム	明治大学小林正美ほか
3月29日	地方自治体のシティプロモーション成功の秘訣と事例を学ぶ！	社会情報大学大学院牧瀬稔
6月20日	ふたば未来学園中学・高等学校の探究的な学習に学ぶ	NPO法人カタリバ 横山和毅
8月22日 8月23日	プロの映像クリエイターに 学ぶ動画制作講座	クリエイター安里研太
9月4日	備中高梁会議2022夏	多数
9月9日	ボードゲーム交流会	吉備国際大学3回生 瀬尾慎之介、横野圭佑
11月8日	長崎県東彼杵町・人口減の町にわずか5年で約20店舗が開業した秘訣！	ひとこともの公社 代表理事森一峻
11月29日	地域に巻き込まれて”体験のわらしべ長者”になる！	東京大学3回生早川芽生
12月18日	備中高梁会議2022冬	さくらや創業者馬場加奈子
2023年		
1月21日	地域”トガリ化”の極意	有限会社アドセンターパル、 代表中井史生

出所 筆者作成（黄色背景は学生企画・運営）

こういった緩やかなつながりによって、越境学習の効果が見え始めた。

表8の黄色背景のイベントは学生が企画・運営して

実践したもので、9月9日は、インターンとしても参加していた3年生2名（1名筆者ゼミ）がボードゲーム大会を企画。市内のお家に広告を出しながら取り組んだイベントで、その後も積極的にイベントを企画し参加する変化が見られた。また、11月29日東大生による講演会は、「みんなのごはん」に参加し、企画をしていた1年生が提案したもので、第3回備中高梁会議の実行委員長も行った。同じ時期に参加していたもう1人の1年生も1月21日のイベントを企画するようになり、越境場面の提供と越境ルートを作れば、少しずつ広がっていくのがよくわかった。

プロジェクトを立ち上げていく、この2点を持って越境学習者になったと判定される。

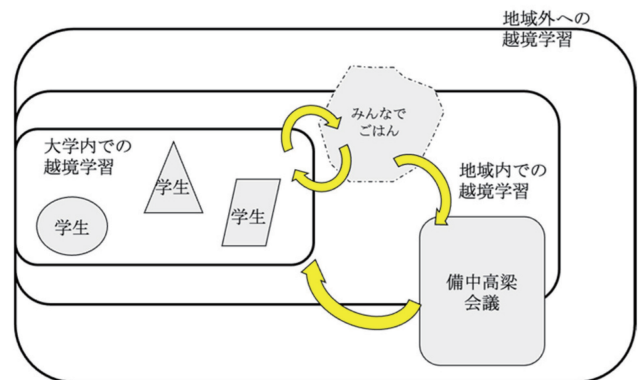


図5 デザインされた越境学習

出所 筆者作成



写真12 (左) 9月9日ボードゲーム (筆者ゼミ3年生がゲームのファシリテーションをしている様子)

写真13 (右) 11月29日イベント (本学科1年生が司会進行している様子)



写真14 (左) 第3回備中高梁会議 (司会, 質問は共に本学1年生)

写真15 (右) 第3回備中高梁会議の様子 (発表はフィジー留学した筆者ゼミ3年生)
(4枚とも高梁100Challenge提供)

4. 授業・ゼミ・実践共同体へつなげる学びの検証

さて、これまでの実践を振り返ろう。表1の越境学習におけるルーブリック評価に基づく越境学習のゴールに加えて、ナレッジ・ブローカーになって、周囲の人々に越境の橋渡しができるようになり、新たなプロ

本稿では、実践にあたって、授業およびゼミにおいて越境学習を繰り返し、越境の媒介となる「みんなのごはん」のようなゆるやかな集まり、そして、越境しやすく挑戦できる環境を持った実践共同体（備中高梁会議）をつなぎ合わせることを「デザインされた越境学習」の可能性について見てきた。先に結論を言えば、一定の効果は感じられたものの困難さも感じた。

まず実践仮説1-1, 1-2を振り返ってみると、確かに授業の中での「小さな越境学習者」を育てることができたが、越境行動に出る学生はほとんどいなかった。また、本稿でいう「デザインされた越境学習」では、これまでの越境学習が言うような葛藤場面は見られなかった。

2020年以降の全授業で記録している感想アンケートを見ると、小さな越境学習の効果を語る感想が多い。

例えば、2022年地域づくり論（2年生以上）第2回感想をみると、「授業を隣の人と一緒に討論する方式で聞くと、はるかに授業に参加することができ、私の考えを共有するという感じがして良かったです。」（留学生の感想）第10回感想でも、「今回の授業も話し合いが多く、また留学生と話して新たな学びがあったので面白かった。」（日本人学生の感想）などである。

このような「小さな越境学習」を繰り返し受けてきた3年生以上の学生が多く受講している「地域課題解

決法」になると、その効果がはっきりとし始める。

大学近くの高梁市本町地区の地元企業（ひな人形生産日本1）が直面している少子化によるひな人形離れと売り上げ低下への対策プランを作った第12回授業の感想を見ると、「今日は雛人形の課題に対するアイデアを3つの大きいグループに分けられて、話し合いをしました。同じ発想でも具体的なアイデアが違うので、まず同じ発想の人と自分の意見を発表しあって、そのあとはもっと数人のいろんな発想のグループで話し合いをしました。それによって自分の視界を広げて、出したアイデアをより具体的な文章で書いて、自分は本当に社長としてお客様の声を聞いているみたいな感じでした。（省略）」（原文ママ 留学生の感想）。「一人のアイデアが固まった。他人との話し合えば話し合うほど柔らかく、あーもうちょっとほかのものにしてもいいかな、他人の話聞いたら私のアイデアはこの人のアイデアをコラボしてみたら最高じゃないかと思いつきはじめた。新たなアイデアも浮かべはじめた。」（原文ママ 留学生の感想）。「今回の講義を通して、今までは雛人形そのものを売るにはどうしたらいいかばかり考えていたが、色々な人の意見を聞く中で、雛人形の技術そのものに価値をつけてやる。という面白い考えも知れてよかった。」（原文ママ 日本人学生の感想）「同じ考えのグループ内でも色々な意見を聞くことができたが、越境学習では、「生地を服や財布などにする」「ガチャガチャにする」「アニメやインフルエンサーなどとコラボする」など、さらに多くの意見を聞くことができた。また、自分は失われた「お守り」という側面に拘るのは良くないという考えだったが、逆に、その思いを尊重しつつ新たな方策を模索しても良いのではないかという意見も出た。今日聞いた意見をグループごとに総合して、それを突き合わせることでより良い提案になると思う。」（日本人学生の感想）。

このように、小さな越境学習での効果を物語る声はたくさん書かれているが、小さな越境学習の繰り返しで、越境が起きるとは限らない。

上記授業と同様の時期にほぼ同じ受講生が受けている2022年度地域マネジメント第12回で「コミュニケーションが下手な日本人についてどう思う？日本人が変わるためにはどうすればいい？」を留学生に聞くと、「日本人は必要があるとき話すだけです、何もなかった場合は、知らないふりをします。外国に住むために一番大事はコミュニケーションです。日本人はコミュニケーションできなければ外国に住むことができないと思います。コミュニケーションが変わってください」（原文ママ）「日本人とコミュニケーションをとる機会があった人も同じ考えを持っているのではないかと思います。つまり、みんな「日本人の考えがよくわからない」という謎を考えているのです。日本の文化では、相手に直接意見を言うのは悪いことだと考えられています。外国人の場合は逆になります。彼らはとてもフレンドリーで、彼らがどう思うかを言います。機会があれば外国人とコミュニケーションをとってください」（原文ママ）などの意見が出てきた。

同じ回で日本人学生には、「いつからコミュニケーションを取るのがめんどくさくなったのか？なぜめんどくさいのか？」という質問を試してみた。

代表的だったものを取り上げてみると、「小学校高学年～割と最近までめんどくさかった。特に用がない時はなんて話していいか分からないし、いつもと違う場所でのコミュニケーションが上手くできずに、関係が悪化してしまうかもしれないと思ってしまうから。また、必ずしも相手が話しかけて欲しいと思ってないのではないかと感じてしまうから。最近では、周りの人と仲良くなれたら嬉しいと思うようになったので、軽く挨拶したり、適度に話しかけるようにしている。」（原文ママ）「中学生の頃からです。今後、関わる可能性があったり関わり続けられれば得のある人とならコミュニケーションを取るのはいけれど必要のないコミュニケーションを取るのはめんどくさいと感じるからです。」（原文ママ）

実際に学生にヒアリングをしても、自分の趣味に関

して越境をする学生はいたものの、実践仮説通りに越境が進まないことが見えてきた。

また、筆者ゼミにおいても、2年間にわたって越境学習を受けてきた学生たち（日本人、留学生問わず）は、高頻度（ほぼ毎週）でイベントや旅行、勉強会などに参加する越境行為が見られる。

しかし、越境学習をあまり受けてこなかった学生（ゼミに入る前から活動的な学生を除く）は、6名中4名は短期間なので一概には言えないが、越境行為がほとんど見られなかった。

5. おわりに

これらを振り返ってみて、実際に越境するためには、越境学習が行われやすい実践共同体へのルートが重要だというのがわかった。言い換えると、「デザインされた越境学習」でなければ、越境学習は本人の自

発性のみ委ねられるので、なかなか難しい面があるのがわかった。また、そのルートに橋渡しするナレッジ・ブローカーとしての教員の役割が重要なこともわかった。ゼミ生の行動を振り返ってみて、越境が盛んになったパターンとそうでない違いはナレッジ・ブローカーとして、教員側による越境への仲介が大きかった。特に、最も越境学習を繰り返した日本人学生は2021年に石川県七尾市で行われたインターンシップを紹介し、1人で参加させたところ、強烈な越境の面白さを感じたところから、どんどん積極的に変わった。2022年には海外留学（1ヶ月）、帰国後は毎週イベントに参加するようになるまで変化した。

今後の実践課題として、デザインされた越境学習の可能性が見えてきたものの、さらに詳しく見ていきたい。特に、ナレッジ・ブローカーによる橋渡しの方法や、越境先としての飛び地の条件を含む越境学習の仕組みを考えていきたい。

引用文献・参考文献・註

- 1) 原田曜平『さとり世代 盗んだバイクで走り出さない若者たち』角川書店. 2013. を参照.
- 2) 牛窪恵『恋愛しない若者たち コンビニ化する性とコスパ化する結婚』ディスカバー・トゥエンティワン. 2015. を参照. 本の中で、2015年内閣府「少子化社会対策白書」をはじめとするデータが、男女の4割がパートナーを欲していない（牛窪は、コスト化した恋愛を望まないことを「恋愛スルー」と呼んでいる）ことを指摘している.
- 3) 住岡恭子『「なまけ」の心理学的研究による中間層大学生の発見』晃洋書房. 2022. p132.
- 4) 社会関係資本の流れでは、社会学ではパットナムを起点に様々な議論がなされている. パットナム『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生—』柏書房. 2006. パットナム『流動化する民主主義:先進8カ国におけるソーシャルキャピタル』ミネルヴァ書房. 2013. パットナム『われらの子ども:米国における機会格差の拡大』創元社. 2017. などを参照.
サードプレイスについては、レイ・オルデンバーグ『サードプレイス—コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』みすず書房. 2013. を参照.
- 5) 渡瀬裕哉『なぜ、成熟した民主主義は分断を生み出すのか アメリカから世界に拡散する格差と分断の構図』すばる舎. 2019. p7.
- 6) 総務省「情報通信白書」によると、エコーチェンバーとフィルターバブルは以下になります.
<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r01/html/nd114210.html> (2022年12月31日確認)
〈エコーチェンバーについて〉
「エコーチェンバー」とは、ソーシャルメディアを利用する際、自分と似た興味関心をもつユーザーをフォローする結果、意見をSNSで発信すると自分と似た意見が返ってくるという状況を、閉じた小部屋で音が反響する物理現象

にたとえたものである。

〈フィルターバブルについて〉

アルゴリズムがネット利用者個人の検索履歴やクリック履歴を分析し学習することで、個々のユーザーにとっては望むと望まざるとにかかわらず見たい情報が優先的に表示され、利用者の観点に合わない情報からは隔離され、自身の考え方や価値観の「バブル（泡）」の中に孤立するという情報環境を指す。

エコーチェンバーは、キヤス・サンスティーン『インターネットは民主主義の敵か』毎日新聞社、2003。

フィルターバブルは、イーライ・パリサー『The Filter Bubble: What The Internet Is Hiding From You』penguin、2012。がもとになっています。

- 7) 石山恒貴/伊達洋駆『越境学習入門 組織を強くする「冒険人材」の育て方』日本能率協会マネジメントセンター、2022。これまでの越境学習を踏まえた論文をわかりやすく入門編に書かれたもの。
- 8) エティエンヌ・ウェンガー、リチャード・マクダーモット、ウィリアム・M・スナイダー『コミュニティ・オブ・プラクティス—ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』翔泳社、2002。
- 9) 石山恒貴「企業内外の実践共同体に同時に参加するナレッジ・ブローカー（知識の仲介者）概念の検討」経営行動科学第29巻第1号、2016。p17-33。
- 10) 前掲書7)。p12。
- 11) エティエンヌ・ウェンガー、リチャード・マクダーモット、ウィリアム・M・スナイダー『コミュニティ・オブ・プラクティス—ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』翔泳社、2002。p33。
- 12) 松本雄一『実践共同体の学習』白桃書房、2019。p48。
- 13) 前掲書12)。p49。
- 14) 前掲書12)。p50-51。
- 15) 前掲書12)。p52。
- 16) 前掲書7)。p35。
香川秀太「複数の文脈を横断する学習への活動理論的アプローチ」『心理学評論』51(4)。p470。をもとに再編集した図を掲載している。
- 17) 香川秀太・青山征彦編『越境する対話と学び 異質な人・組織・コミュニティをつなぐ』新曜社、2015。p41。この本では、多重混成は、ハイブリダイゼーションと表現され、定義として「異質な文化が同じ時間と場所で交わり、新たなモノや知識や実践を創造」としている。
- 18) 前掲書7)。p36。において、石山・伊達は、越境学習について状況間移動を主に限定して論じている。
このことは、往還運動による学びの深化（垂直展開）を重視する立場と、異なる文脈での視野の拡散（水平展開）を重視するかで異なる。二重編み組織を構成しやすい状況間移動では学びの深化（垂直展開）がしやすいため、学習デザインがしやすい。多重混成はその性質から、多重成員者が集まれる会議やワークショップなどに多い実践共同体であるがゆえに、越境先を探索し（学びの水平展開）、異なる解釈に出会って深めるきっかけ（学びの垂直方向）などに向いている。
- 19) 前掲書7)。p121。
- 20) 前掲書7)。p121-124。
- 21) 前掲書7)。p168。
- 22) 人口28,469人、うち外国人913名。岡山県で最も人口比率における外国人住民の多い市である（外国人の人口比率3.2%）。高梁市<https://www.city.takahashi.lg.jp/soshiki/13/jinkou3.html>（2022年12月31日確認）
- 23) 地域みらい留学については以下参照。
全国での参加校は98校。 <https://c-mirai.jp/>（2022年12月31日確認）
- 24) 藤崎雅子「先進校に学ぶキャリア教育の実践 地域と共に、生徒の「やってみよう」を育て「やってみる」を支援。次の挑戦へつなぐ：津和野高校（島根・県立）」『キャリアガイダンス』54(4)。リクルート進学総研、2022。p50-

53. を参照. 津和野会議の取り組みについて<https://www.facebook.com/groups/660652834473308/>を参照. (2022年12月31日確認)
- 25) ジグソー学習については, 1978年に出版された『ジグソー学級』(日本では1986年に翻訳)が絶版になり, 2011年に加筆されて出版した第2版を翻訳されたエリオット・アロンソン/シェリー・パトノー『ジグソー習ってなに? みんなが協同する授業』丸善プラネット, 2016. を参照した. アロンソンがジグソー学習を考案したのは, 人種差別問題が頻繁に起きていた1970年代に, どうかして融合できないかと考えた多文化共生を目的としたジグソー学習だった. 日本では, 社会構成主義に基づいた学習方法として, 故三宅なほみ東大教授を中心に作られた「知識構成型ジグソー学習法」が一般的である. 本稿の授業においては, 前者のジグソー学習をベースに考えている.
- ワールドカフェについては, 考案者であるアニータ・ブラウン, デイビッド・アイザックス, ワールド・カフェ・コミュニティ『ワールド・カフェ カフェ的対話が未来を創る』HUMAN VALUE, 2007. を参照した. ワールドカフェの手法は, 実践共同体での取り組みに影響を受けたと文中にも書かれている (p245-246).
- 26) クリス・アーンスト, ドナ・クロボット=メイソン『組織の壁を越える「バウンダリー・スパニング」6つの実践』英知出版, 2018. p81-85.
- 27) 松尾睦『仕事のアンラーニング 働き方を学びほぐす』同文館出版, 2021. p6-8.
- 28) 2019年津和野会議報告書より抜粋.
- 29) 「高梁100Challenge」ホームページより.
<https://100challenge.wixsite.com/takahashi/conference> (2022年12月31日確認)
- 30) 前掲書29)より抜粋.